

ひと・まち・自然

トラまちPress

(財)世田谷トラストまちづくり情報誌

創刊号
September 2008



いのちを育むまちへ

トンボをとり、ヤゴをつかまえ、バッタを追つたあの夏。ヒグラシの鳴き声を聴きながら帰路についた、誰の心にある子どもの頃の思い出深い風景。そこには、暮らしどと密につながる自然があった。ずっと変わらず、そこにあると思っていた風景。現在はどうだろう?

トンボをとった原っぱにはマシンションが林立し、隣近所の顔は知らない。子どもが出かけたときに持つのは、GPS機能つきの携帯。学校から帰つてランドセルを置いて出かける先は、友だちの家でゲーム。都会では当たり前になってしまった光景がそこにある。ライフスタイルは、時代とともに変わっている。

そんな時代の中、世田谷にはまだ身近な自然が残つている。世田谷トラストまちづくりがかわり、人とのつながりや場を守り、次の世代である子どもたちに伝えていくこうという区民の試みも始まつていて。そんな試みの中から、まずは、

水辺の豊かさを 次世代にも

「今日は川に入つてガサガサ

をやります!」

子どもたちの目が輝く。「せたがや野川の会」この夏一番のイベントだ。達人がお手本を披露。川の石をどけ、岸辺のあたりに網を構え、追い込むように足でガサガサと踏みつける。と、びっくりした小魚や小エビが網にかかる、というきわめて原始的な漁法を伝授。子どもたちが川に入る。川底は思ったよりも藻が生えていて、滑りやすい。皆へっぴり腰。それを見て笑つている大人もへっぴり腰。こんな時間は貴重だ。

かも」



「なんかいる!」つかまえた生き物に興味津々。まさに発見の連続だ。

網にさつそく小エビがかかる。

そこからは、転んでもずぶぬれになつても獲物をゲットするのに夢中だ。大物をゲットした子どもにインタビュー。どうやつてつかまえたの?

「かんたんだよ。オレって名人かも」

自然が多く残つている「野川」を、子どもたちに知つてもらおうと活動を続けている「せたがや野川の会」の野川せせらぎ教室を訪ねた。

特集

自然に学ぶ、 まちに育つ

Nature and Community grow hand in hand

人は自然の豊かな恵みにふれることで、感性が育てられる。幼い頃から土、水、光、風といった自然を体感し、そうした自然が育んできた「いのち」に出会うことで、心が育っていく。都市化により自然環境が失われつつある。

それでも世田谷には残された環境を有効に使って、子どもたちに「生きる力」を伝えていく活動をしている人びとがいる。水辺、森林、さらには住宅地の一画に残された空き地で、自然にふれる場を守り育てている現場を追った。



やがて手に手に獲物をぶらさげた子どもたちが戻ってくる。

メダカやコイの稚魚のほかに、ウシガエルのオタマジャクシや、スッポンなんていう珍客も混じっている。獲物を水槽に入れ、生き物の解説。ハゼの仲間のゴリ、タモロコ、モツゴ。知らなかつた名前や生態が解き明かされる。

原則はキヤツチアンドリリーですが、珍客のウシガエルは、ツボカビ病という現在カエルに蔓延している。獲物を水槽に入れ、生き物の解説。ハゼの仲間のゴリ、タモロコ、モツゴ。知らなかつた名前や生態が解き明かされる。



「オレってスゴイ！」胸をはる小さな名人たち



延している病気のキヤツチアであるため、川には戻さない。川の生態系を守ろうとするメッセージもちゃんと伝えられる。

世田谷トラストまちづくりの野川ボランティア養成講座から発足したこの会のメンバーの一人は、「我々はね、さんざん川で遊んだからもういいんです（笑）。でも、川で遊んだことのない若い人や子どもにいきくら環境が大事、水辺の生き物が貴重と伝えてもピンとこ

ない。川で遊ぶことの楽しさや生き物を見つける喜びをまず知つてもらつて、そこから次の世代に伝えていてもらえた

らと考えているんです」。

「せたがや野川の会」では、今回のがサガサや昆虫観察などを年に4回行つて。こういった親子向けの企画の他に、川の清掃活動、植物や生き物の調査といった活動にも取り組んでいる。小さな名人たちへ期待は大きい。

1. ふだん間近で見ることはめったにない、本物にふれることができる貴重な瞬間。2. 溝水から生まれた野川。川に入ると藻が生えていて満点。3. 「見せて見せて！」小さい子も真剣だ。



4. ゴリ、モツゴ、コイの稚魚。わずかな時間でもたくさんの生き物が獲れる。5. 結びつきは世代を超えて。「ほら、こうやってつかむんだよ」。



子どもたちに 世田谷の原風景を

次に訪れたのは、世田谷区立「桜丘すみれば自然庭園」。

ここは区内では珍しい常駐のインタークリター（自然解説員）がいる公園だ。訪れた日は、「虫とあそぼう」のテーマで、園内のどこかにいるはずの虫の写真を使った、オリジナルゲーム「むしむしビンゴ」の紙を片手に、子どもたちが夢中で虫を探しているところだった。

植村家の屋敷があったこの場所は、かつては6000坪という広大な敷地だった。富士山を借景とし、武藏野の雑木林を再現した敷地の一画には、木造の日本家屋が建っていた。道路の敷設や相続のために3分の1が残り、世田谷区が買

い取った敷地は現在2000坪余り。それでも子どもたちが虫を発見し、走り回るには余りある広さだ。

こわごわバツタを手にのせてみる子、つかまえたカマキリをじっくり観察する子、大人を質問攻めにする子、さまざまなもので、大人を驚かせたり、喜んだり。この日は、昭和女子大学の常喜豊先生が訪れ、先生の研究テーマであるクロツヤムシについてお話をあった。子どもも大人もみんな真剣に聞き入っている。

区民参加でトラストまちづくりが植生調査を行うことからはじめた「桜丘すみれば自然庭園」には、現在、地域住民のグループ「世田谷すみればネット」のメンバーを中心

まなかたちで関わっている。小学生、保育園児、東京農業大学の学生、さまざまな分野の専門家、そしてすみればネットのメンバーという具合だ。独自のルールもみんなで決めていく。年齢や仕事もいろいろな人たちの集まる場が、子育て中の親と子にも良い効果をもたらし、親たちに自分の子どもだけじゃなく、みんなで見守るみんなの子どもという視点が育つているようだ。

「僕らが子どもの頃にはとて

も広い原っぱがあつて、それが大人になつて行つてみると、なんだ、こんなに小さかつたのかと思う場所つてありますよね。子どもたちにとって、ここがそんな原風景になつてくれたらと願っています」と、「世田谷すみればネット」代表の大江亮一さん。

春になると小さなスミレが花をつけるように、大江さんたちの活動も少しずつ、子どもたちの中に根をはつていきつたあるようだ。

1. 「さあ、どこにいるかな？」みんなで探すのは楽しい。女の子たちも今日は虫博士に変身だ。2. オリジナルゲーム「むしむしビンゴ」に出ている虫発見！



特集

自然に学ぶ、 まちに育つ

Nature and Community grow hand in hand



自然は「生きる力」の原点

環境教育実践&研究者 小澤紀美子

「外なる自然」と「内なる自然」

地域で子どもの元気な声を聞くことが少なくなっています。

どこで遊んでいるのでしょうか。元気さを象徴する「がき大将」は絶滅危惧種になってしまったのでしょうか。

都市化の進展によって自然環境が減少し、人工環境が増えるにつれて人びとは自然との交流を求めてはじめています。書店にはトレッキングや小さな自然を求めて歩くための本があふれ、テレビの番組でも自然とのふれあいを楽しむライフスタイルの紹介が多くなっています。

もちろん子どもたちにも、1週間前後の期間を農山村で、自然体験や生活体験をさせる試みもあります。しかし準備された自然体験を「サブリメント」として一方的に大人が子どもに与える体験は、どのような効果をもたらすのでしょうか。

もちろん子どもたちにも、1週間前後の期間を農山村で、自然体験や生活体験をさせる試みもあります。しかし準備された自然体験を「サブリメント」として一方的に大人が子どもに与える体験は、どのような効果をもたらすのでしょうか。

20世紀の文明は、物質的な豊かさと引き換えに膨大なエネルギーを浪費し、「外なる自然」破壊としての地球温暖化の危機、資源枯渇の危機、生態系の破壊などの環境問題を引き起こしています。そうした地球環境の悪化は、次世代に取り返しのつかないツケを残しているだけでなく、「内なる自然」という人間が本来生き物としてもついる感性や五感の劣化などをもたらしているのではないでしょうか。

近代化の過程は、効率性重視のもと、さまざまな関係を分断化させています。子どもに限らず大人も、自然や他者とのかかわりが希薄になり、人との関係づくりのスキルも劣化させてきています。人間関係を築けない人が育っているといえるのではないでしょうか。

地域の力で自然にふれる場を

体验を積み重ねていくことで、想像力や創造性が培われていくといえます。

ところが近代社会は「土壤を耕す」こと、つまり子どもの感動や時間の流れを感じとする心の働きや、生命のつながりの中で生きていることを「経験」することの重要性を無視して、想像力や創造性の基盤としての豊かな感受性を育むことを捨ててきたのではないかでしょうか。さらに地域社会での人間関係の希薄化は、地域のもつ教育力をも低下させ、子どもは人と人の関係性の中で共感も得られないまま、孤立化しているのではないかでしょうか。

子どもの危機的状況は、日本の大人社会を映し出している鏡といえます。

自然体験は学びの土台づくり

生き物として生態系の一部である人が、自然への感動をさまざまな世代を通して共有することは、自然との共生への理解を深めていく第一歩です。「自然は人間の苗床」といわれるよう、幼児の時から自然とのふれあいの機会を多くもたらすことによって、子どものみずみずしい感受性は刺激されます。生物学者のレイ・チエルカーンは子どもたちに生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー（神秘さや不思議さに目を見はる感性）」をもち続けさせることの重要性を問い、「子どもたちが出会うひとつひとつが、やがて知識や知恵を生みだす種子だとしたら、さまざまな情緒や豊かな感受性は、この種子を育む肥沃な土壤である。幼い子ども時代は、この土壤を耕すときである^{*1}」、カーネンはさらにセンス・オブ・ワンダーは「やがて大人になるとやつてくる倦怠と幻滅、わたくしたちが自然という力の源泉から遠ざかる」と、つまらない人工的なものに夢中になることなどに対する解毒剤になる」と言っています。

子どもの学びの土台づくりは、幼児期から草花や小さな生き物にふれるという自然体験にあります。本来人間がもついる五感を刺激し、好奇心を育み、感動を知り、豊かな感受性の発達をうながす基本的な要素です。自然とかかわることによつて、子どもはさまざまなインスピレーションを感じていきます。それは「認識の源泉としての驚嘆」は「エコロジカルな環境のつながりを言葉の上ではなく、イメージとして身体的に獲得^{*2}」していくのです。そうした基盤の上に、生活体験や社会

そこで地域に子どもの「内なる自然」を豊かにする出会いの場、「自然にふれ、自然を感じ、自然に親しむ場」をつくっています。これが求められます。水、土、みどり、太陽などや、小さな昆虫にふれる場は、遠くの山海川のある大きな自然の場に出かけなくても可能です。

自然に学ぶ、まちに育つ

Nature and Community grow hand in hand



小澤紀美子●KOZAWA, Kimiko
北海道旭川市生まれ。子どもの環境学習が主な研究テーマ。東京学芸大学名誉教授、東海大学特任教授。日本環境教育学会会長、こども環境教育学会副会長、NPO法人こども環境活動支援協会代表理事。共著に「これからの環境学習—まちはこどものワンダーランド」「まちワーク: 地域と進める校庭&まちづくり総合学習」「地球環境デザインの継承」などがある。

身近な街区公園や幼・保育所の園庭、学校の校庭でも日本の子どもは小さな生き物を見つけ、その命に自分の命を重ねたりして、多種多様な生命とのつながりを実感して、日々遊び、暮らしているのです。幼児期から子どもが遊ぶ公園や園庭は生き物の棲みかであり、自然循環の仕組みの上に成り立つていることを、生活体験の積み重ねから知つていています。学びの場づくりには、保護者や地域の方々の協力が不可欠です。教室だけでは子どもの学びの意欲を発展させるには限界があるので、校庭に地域の方々の畑を作ったり、ビオトープを子どもと地域の大人と一緒に作っていくことも大人との大事なふれあいの場となります。大人の活動や話しぶりから、子どもは自分の価値観と合う人を見いだし、その価値観に潜入し、共感し、変容していきます。

*1 上述著者「センス・オブ・ワンダー」(新潮社)

*2 Eコラボ「イマジネーションの生態学—子供時代における自然との詩的共感」(恩索社)



都会の中の行楽地

兵庫島から

多摩川と野川を眺める

「子どもの頃はさあ、窓からふんどし乾かしながら玉電で帰ったものさ」

長い年月をかけて武藏野の地形をつくりだした全長138キロの1級河川、多摩川。100年前の1907年(明治



二子玉川駅ホームから見える多摩川と野川にはさまれた兵庫島公園。

水をたどる散歩

兵庫島公園から岡本公園民家園へ

世田谷の身近なまちを歩き、地域の宝物を再発見する。
そんな小さな旅日誌を紹介する。

今回は、多摩川にある兵庫島から岡本公園民家園まで距離にして約1.5キロの道のりを、水をたどりながら歩いてみた。



3. 谷川緑道にある水車小屋跡の石碑は、今は人の流れを見守るようにたたずんでいる。4. ゆるやかなカーブを描きながら進む谷川緑道で、のんびりと寝転がる猫に出会う。5. 建物の上にあがると、かつての川の姿を連想させる谷川緑道が確認できる。住宅の間をぬうようにみどりが連なっている。

兵庫島を後にして、古い堤防の石段をトントントンと駆らしげな子ども。ピニールシー



トを広げて日光浴をする大人。玉川八景の一つになっているこの風景を出発点に、散歩を始めよう。



昔と同じように兵庫島公園周辺では、いろいろな人びとが思い思いに時間を過ごす。網で川の生き物をつかまえた誇らしげな子ども。ピニールシー



け上がる。堤防を越えると多摩堤通りだ。右手に、くしくも玉川電車が廃止された1969年(昭和44)に開業した、玉川高島屋ショッピングセンターが見える。



多摩堤通りの歩道を歩くと、大山道の道標が建っている。左目にやると谷川が野川に流れ込む。堤防を越えると多摩堤通りだ。右手に、くしくも玉川電車が廃止された1969年(昭和44)に開業した、玉川高島屋ショッピングセンターが見える。



多摩堤通りの歩道を歩くと、大山道の道標が建っている。左目にやると谷川が野川に流れ込む。堤防を越えると多摩堤通りだ。右手に、くしくも玉川電車が廃止された1969年(昭和44)に開業した、玉川高島屋ショッピングセンターが見える。



多摩堤通りの歩道を歩くと、大山道の道標が建っている。左目にやると谷川が野川に流れ込む。堤防を越えると多摩堤通りだ。右手に、くしくも玉川電車が廃止された1969年(昭和44)に開業した、玉川高島屋ショッピングセンターが見える。



多摩堤通りの歩道を歩くと、大山道の道標が建っている。左目にやると谷川が野川に流れ込む。堤防を越えると多摩堤通りだ。右手に、くしくも玉川電車が廃止された1969年(昭和44)に開業した、玉川高島屋ショッピングセンターが見える。



多摩堤通りの歩道を歩くと、大山道の道標が建っている。左目にやると谷川が野川に流れ込む。堤防を越えると多摩堤通りだ。右手に、くしくも玉川電車が廃止された1969年(昭和44)に開業した、玉川高島屋ショッピングセンターが見える。



多摩堤通りの歩道を歩くと、大山道の道標が建っている。左目にやると谷川が野川に流れ込む。堤防を越えると多摩堤通りだ。右手に、くしくも玉川電車が廃止された1969年(昭和44)に開業した、玉川高島屋ショッピングセンターが見える。



多摩堤通りの歩道を歩くと、大山道の道標が建っている。左目にやると谷川が野川に流れ込む。堤防を越えると多摩堤通りだ。右手に、くしくも玉川電車が廃止された1969年(昭和44)に開業した、玉川高島屋ショッピングセンターが見える。



多摩堤通りの歩道を歩くと、大山道の道標が建っている。左目にやると谷川が野川に流れ込む。堤防を越えると多摩堤通りだ。右手に、くしくも玉川電車が廃止された1969年(昭和44)に開業した、玉川高島屋ショッピングセンターが見える。



多摩堤通りの歩道を歩くと、大山道の道標が建っている。左目にやると谷川が野川に流れ込む。堤防を越えると多摩堤通りだ。右手に、くしくも玉川電車が廃止された1969年(昭和44)に開業した、玉川高島屋ショッピングセンターが見える。



多摩堤通りの歩道を歩くと、大山道の道標が建っている。左目にやると谷川が野川に流れ込む。堤防を越えると多摩堤通りだ。右手に、くしくも玉川電車が廃止された1969年(昭和44)に開業した、玉川高島屋ショッピングセンターが見える。



多摩堤通りの歩道を歩くと、大山道の道標が建っている。左目にやると谷川が野川に流れ込む。堤防を越えると多摩堤通りだ。右手に、くしくも玉川電車が廃止された1969年(昭和44)に開業した、玉川高島屋ショッピングセンターが見える。



多摩堤通りの歩道を歩くと、大山道の道標が建っている。左目にやると谷川が野川に流れ込む。堤防を越えると多摩堤通りだ。右手に、くしくも玉川電車が廃止された1969年(昭和44)に開業した、玉川高島屋ショッピングセンターが見える。



多摩堤通りの歩道を歩くと、大山道の道標が建っている。左目にやると谷川が野川に流れ込む。堤防を越えると多摩堤通りだ。右手に、くしくも玉川電車が廃止された1969年(昭和44)に開業した、玉川高島屋ショッピングセンターが見える。



多摩堤通りの歩道を歩くと、大山道の道標が建っている。左目にやると谷川が野川に流れ込む。堤防を越えると多摩堤通りだ。右手に、くしくも玉川電車が廃止された1969年(昭和44)に開業した、玉川高島屋ショッピングセンターが見える。



高橋吉光さん

第①回

元気があるまちには、人と人をつなぐ「結び葉」のような住民がかなならずいる。

第1回は世田谷の原風景のひとつともいえる竹林を守りながら、竹とんぼ作りを通して、子どもたちのしなやかな心身が育つことを願っている。

「自 信を持ってやれ！」

ここは夏休みの給田小学校図工室。竹とんぼ作りの教室が行われている。しかしそこは、いわゆるおじいちゃんと孫世代のはのほとした交流の場ではない。小刀こそないが、キリがある。ライターがある、瞬間接着剤がある。使い方を間違えればケガをする。子どもたちを見守る高橋さん的眼は鋭い。

「竹とんぼおじさん」

高橋吉光さんはもともと警察官だった。経堂駅前の交番に勤務していたこともある。31年間勤めた後、足を悪くして給田の自宅に閉じこもっていた。そこにケン玉、ペーパーマーチ、釣刺などの昔遊びが、世田谷の子どもたちの間にも復活してきた。竹とんぼも例外ではない。

外ではない。子どもの頃竹とんぼで遊んだ、区内在住の竹とんぼおじさんたちが、ぞろぞろと高橋さんの家にある竹

やぶにやってきてこう言った。
「ここにある切り落とした竹、とんぼの羽に使えないかな？」

給田六所神社の氏子として



自宅の竹やぶの前で、竹とんぼの羽根のサイズに切り出した竹片を見せてくれた高橋吉光さん。

は

は夏みかんも採れる。竹とん

ぼとの出会いは、高橋さんが再び地域の子どもたちとふれ

あえるきっかけとなつた。

竹とんぼおじさんに変身し

た高橋さんは忙しい。ごみと

して燃やされる運命だった竹

たちを、15×2センチの長方形

におじさんの手から子どもの

手に渡り、くるくると回転し

ながら大空に舞い上がる竹と

んば。地上には、2つの世代の

笑顔。この笑顔に魅せられて、

た高橋さんは足の調子が悪くな

る冬を除いて、小学校の課外

授業として竹とんぼ教室を開

き、現代の子どもたちと真剣

に向か合っている。

こまやかな指使いが大切

給田小学校の図工室。竹とんぼおじさんを待ち構える約60人の子どもたち。机には、

地域の小学校で引っ張りだこの竹とんぼおじさん。毎週のようにいろいろな小学校の竹を切って、半年間乾かすところな薄茶色になつて、竹とんぼの羽にちようどいい材料になります

「竹とんぼの羽になつていている竹の部分。これはうちの竹やぶで取れたものです。みどりの竹を切つて、半年間乾かすところな薄茶色になつて、竹とんぼの羽にちようどいい材料になります」

地域の小学校で引っ張りだこの竹とんぼおじさん。毎週竹とんぼ教室に出向く。「来週は篠原小学校、そして桜丘小学校」と、これも誇らしげに教えてくれた。

「半年待つてから、お願い！また来てね」

高橋さんに教室で厳しく指導された子どもたちは、いつもか竹とんぼおじさんのファンになつていた。

子どもたちの遊び心を引き出す

出来上がった竹とんぼを「とばしこ」するため体育館に移動する。校舎の窓から給田の景色を見ながら高橋さんがボツリと言つた。

「この辺は今でこそ住宅が密

集しているが、もともとは畠の中の学校だった」。給田小学校時代、体育の時間はいつも

たくさんの遊びが手に入る

現代。受動的な遊び道具はあ

る。しかしながら、竹とんぼの眼で見守る。

鉛筆で竹の羽に対角線を引

き、中心を確認してキリで穴を開ける。その穴に軸を挿し、空き瓶の上で軸を転がして、羽の左右のバランスを見る。羽の両端を指で押さえ、アルミ箔でくるんだ竹を下からライ

ターの火であぶり、ぐつとひね

つてそこで我慢。「いたい、いたい」とすぐ手を離してしまう。子どもたち。最後に軸と羽根を瞬間接着剤で固定する。

「我慢することを知らない」



↑各自練習がすんだら一列に並んで“とばしこ”。いっしにーのーさん！」でいっせいに飛ばす。
→キリを使った穴あけの工程。羽根の中心に軸を刺す穴を直角に開ける。まずはカマボコ板で練習する。
↓切り落とされた竹は竹とんぼの羽根となる。ただ捨てられていたゴミが、竹とんぼとして再生する。



と嘆く竹とんぼおじさん。「現代の生活の中に、竹を曲げるよう、しなやかな感覚を育てる機会がないからだ」とも言う。ボタンよりもチャック。靴紐よりもマジックテープ。しなやかな、こまやかな指使いを必要としない現代の暮らしの中で、竹とんぼ作りのような手作業の経験はとても貴重だ。

子どもたちの遊び心を

引き出す

出来上がった竹とんぼを「とばしこ」するため体育館に

移動する。校舎の窓から給田

の景色を見ながら高橋さんが

ボツリと言つた。

「この辺は今でこそ住宅が密

集しているが、もともとは畠の中の学校だった」。給田小学校

時代、体育の時間はいつも

たくさんの遊びが手に入る

現代。受動的な遊び道具はあ

る。しかし、竹とんぼの眼で見守る。



結び葉

c o l u m n

高橋さんは竹とんぼ教室以外に木工の楽器を作る教室や、竹でお箸を作る「My箸づくり教室」を地域で開いている。写真は竹とんぼおじさん仲間の松本和茂さんが手作りした竹の楽器。上段の2本は和三(なごみ)笛。真ん中の細長いのは「竹のトロンボーン」とか「スライド笛」と呼んでいる。下の段は左からどんぐり笛、小型のうぐいす笛。ピートという単純な音を出すのはどの笛も簡単だが、音階を出して曲を吹くのはちょっとした名人芸。



の子どもたちに遠慮する竹とんぼおじさんはいない。「真剣にやらないとケガをするぞ」と厳しい眼で見守る。

そこには、あきっぽい低学年の子どもに遠慮する竹とんぼおじさんはいない。「真剣にやらないとケガをするぞ」と厳しい眼で見守る。

鉛筆で竹の羽に対角線を引

き、中心を確認してキリで穴を開ける。その穴に軸を挿し、空き瓶の上で軸を転がして、羽の左右のバランスを見る。羽の両端を指で押さえ、アルミ

箔でくるんだ竹を下からライ

ターの火であぶり、ぐつとひねつてそこで我慢。「いたい、いたい」とすぐ手を離してしまう。子どもたち。最後に軸と羽根を瞬間接着剤で固定する。



トラスト賛助会員募集中！

世田谷のみどりや歴史的環境を守り育て次世代に引き継ぐ
「世田谷のトラスト運動」をささえるトラスト賛助会員になりませんか。
賛助会員費は、市民緑地の維持管理をはじめとする、
当財団が進めるみどり保全や歴史的環境を守る活動に使われています。

会員種別と年会費

・個人／年1口 1,000円	・子ども／小学校在学中全期間 1,000円
・家族／年1口 2,000円	・法人／年1口 10,000円

会員特典

- 1 トラストまちづくり課の情報誌「トラまちPRESS ひと・まち・自然」等の送付
*子ども会員へは、子ども情報誌「ちびモリ」を送付します。
- 2 財団主催イベント等の参加費の割引
- 3 財団発行図書、グッズの割引
- 4 世田谷美術館及び文学館の企画展、
静嘉堂文庫美術館の展覧会の入場料の割引（子ども会員は対象外）
- 5 協力店での花苗割引購入（子ども会員は対象外）

*詳しくは当財団までお問合せください。

トラスト賛助会員数 ●2008年8月31日現在

個人	家族	グループ	法人	特別	子ども	学校	賛助会員合計
1,868	1,316	26	650	42	42	80	4,024会員

提携美術館インフォメーション

トラスト賛助会員の方は、優待制度をご利用いただけます。
提携美術館では、以下の展示が予定されています。

世田谷美術館

- ダニ・カラヴァン展
9月2日～10月21日
山口薰展～都市と田園のはざまで
11月3日～12月23日
十二の旅：感性と経験のイギリス美術
2009年1月10日～3月1日

世田谷文学館

- 地に伏して花咲く～宮尾登美子展
10月4日～11月30日
第28回世田谷の書展
2009年1月10日～25日
荒井良二 絵本の世界展（仮題）
2009年2月14日～3月29日

静嘉堂文庫 美術館

- 岩崎家の古伊万里－華麗なる色絵磁器の世界－
10月4日～12月7日
静嘉堂文庫の古典籍 第7回
古地図の楽しみ－江戸時代を歩く－
2009年2月14日～3月22日

*展示内容等詳細につきましては直接各施設にお問合せください。

ご寄附のお願い

「世田谷のトラスト運動」は、多くの方のご支援によって支えられています。
2008年1月1日～8月31日までに、86名、8団体の皆さまから、
総額1,080,289円のご寄付をいただき、ありがとうございました。
今後も引き続きご支援の程、よろしくお願ひいたします。



第16回 「世田谷まちづくりファン」 助成グループが決定しました。

5月31日と6月8日に、今年度の「公益信託世田谷まちづくりファン」の公開審査会が開催されました。ベーシック（はじめの一歩、まちづくり活動、ネット文庫制作）部門の公開審査会では、応募34グループ中、26グループへの助成が決まりました。また、まちを元気にする拠点づくり部門の予備選考会では、応募した3グループ全てが予備選考を通過し、12月13日に行われる本審査に向けて、企画を進めることになりました。

新しい「小さな森」初の オープンガーデンを行いました。

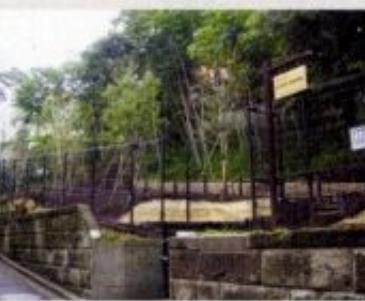
7月5日、5ヵ所目となる、ツタの茂る家と庭のみどりが一体となった「赤堤一丁目小さな森」の初のオープンガーデンが行われました。次回のオープンガーデンは、10月2日午後1時30分～3時の予定です。



*民有緑地の保全を進める市民緑地・小さな森は、随時相談を受けています。あなたの大切なみどりを残し、地域の憩いの場として活用をお考えの方は、トラスト事業担当（tel03-6407-3311）までご連絡ください。

新しい「市民緑地」が 誕生しました。

6ヵ所目となる市民緑地「成城三丁目崖（はけ）の林」の開設工事が完了し、6月23日より一般公開が始まりました。ここは国分寺崖線の斜面林で、落葉樹が多く、季節の変化を楽しむことができます。



所在地／世田谷区成城3-10
開園時間／午前9時～午後5時
(11月から3月は午後4時まで)

休園日／年末年始（12月29日～1月3日）

国分寺崖線のみどりと歴史を感じる 「カフェ517～旧小坂家住宅」を開催しました。

5月17日、当財団の管理施設を多くの区民の方に知っていただくために、瀬田四丁目広場でカフェ517を開催しました。当日はカフェのほか、花苗チャリティやネイチャークラフト、区内に残る貴重な別邸建築「旧小坂家住宅」の建物案内などの催しを、フラワーランド友の会、クラフト同好会（トラストボランティア有志の会）、昨年度のトラストまちづくり大学修了者の協力を得て行いました。



トラスト賛助会員 交流イベントを始めました。

今年度より、賛助会員の方同士、また地域の方との交流を図るイベントを始めました。4月13、20日に「市民緑地散策ツアー」、9月13日には「十五夜を楽しもう！瀬田四丁目広場の夕べ」を開催し、開園時間外等で日頃あまり見ることのできない、また体験できないトラスト保全地の魅力を楽しみました。



「学生インターンシップ・プログラム」の 制度をつくりました。

学生と地域活動グループの相互啓発を促進し、環境やコミュニティ意識を醸成することをねらいとする、インターンシップ・プログラムを始めました。5月27日の説明会を経て、学生自らが研修プログラムを企画し、8月1日には企画を発表し合う場をもちました。その後、7名の大学生は「地域共生のいえ」や「ファンド助成グループ」など区内の活動現場に赴き、その活動に参加しました。

トラストボランティア 支援グループが 新たに2グループ増えました。



世田谷のトラスト運動を支える、トラストボランティアに新たに「せたがや水辺の楽校」「三宿の森緑地・緑グループ」の2団体が支援グループとして加わり、現在22グループとなりました。

子ども・若者が提案する エコシティ世田谷コンクール2008 進行中！

身近な環境への気づきや発見、人と環境が共生するまちづくりの提案を募るコンクールを開催しています。



「世田谷トラストまちづくり大学」 第2期専門クラスを開きました。



地域コーディネーターの養成を目指す「トラストまちづくり大学」の専門クラス第2期生の講座を、7月18日から9月2日まで、全13日のカリキュラムで行いました。「現場を学ぶ、現場から考える、現場と育つ」をモットーにした内容は、毎回参加者に好評をいただいています。

ビジターセンターを リニューアルしました。

世田谷トラストまちづくりのビジターセンターをリニューアルしました。多くの方に利用していただくために、展示スペースを広げ展示内容を充実するほか、お茶やお菓子が楽しめる「くつろぎコーナー」、自然や環境をテーマにした絵本を読んだりできる「子どもコーナー」などを新設しました。



エンマコオロギ

●コオロギ科

エンマコオロギです。

世田谷では、畑や草地、多摩川の河川敷で、その姿を見かけます。日没後、石や重なった枯れ葉の下から出てきたエンマコオロギたちは、待ち構えていたかのようにその本領を發揮し始めます。夕方から耳にする美しい声は、なわばりを主張して鳴く「ひとり鳴き」とよばれるものです。また、朝方には、



小池良実 撮影
背景の高い草がうっそうと茂る多摩川の河川敷。日没の頃、足元を見ると、ほら小さな影がちらほら見えるはず。

いつまでも守りたい。
秋の夜長を彩る美しい聲音

コロコロリ、コロコロリ……。

秋の夕暮れ時、夜のとばりとともに涼やかな鳴き声が響いてきます。日中の残暑を忘れさせてくれるこの声の持ち主は、「日本のコオロギの中で最大種」という輝かしい肩書きを持つ

雄が雌を誘う「誘い鳴き」や、雄同士が喧嘩する「争い鳴き」も聞かれます。

ところで、エンマコオロギの名前の由来をご存知ですか？ その美しい声から想像できない「エンマ」の名前は、正面から見た

顔がエンマさまに似ている、という理由から名付けられました。彼らにとつてみれば、少し理不尽なことかもしれませんのが、顔も姿も、エンマさまの名に恥じないりりしさですよ。

子どもの頃、夢中になってコオロギを追った記憶を持ついる人も多くいると思います。最近では、東京23区内で比較的みどりが多く残る世田谷でも、彼らのすみかとなるような場所が減り、見かけることが少なくなりました。耳を傾ければ童心に帰させてくれるこの聲音を聴くことのできる環境を、いつまでも残していくのです。

ひと・まち・自然

トライアチ Press 創刊号 2008年9月発行



発行／財団法人世田谷トラストまちづくり

編集／財団法人世田谷トラストまちづくり トライアチ Press 課

〒155-0031 東京都世田谷区北沢2-8-18 北沢タウンホール7階 Tel.03-6407-3311, 3313 Fax.03-6407-3319

<http://www.setagayatm.or.jp/>

編集協力

松井編集室

取材・文

小池良実 (P2~7),
中山雅夫 (P10~15)

イラスト

来迎純子 (表紙, P8~9),
南樹里 (P13)

デザイン

須崎み江

写真

佐藤隆俊 (P2~7),
小池良実 (P4~7),
中山雅夫 (P10~15)

©財団法人世田谷トラストまちづくり

2008 Printed in Japan
本誌掲載の写真・記事等の無断転載および複写を禁じます。